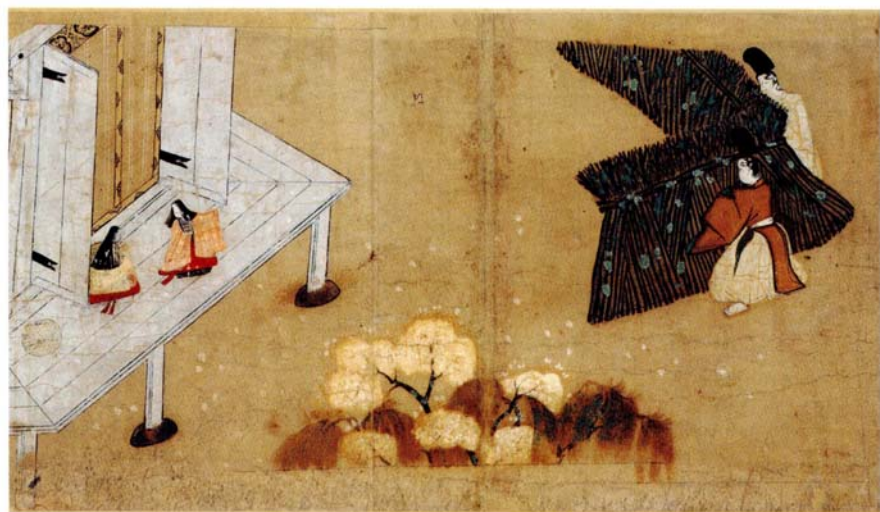




(北山における管弦の場面)



(光源氏、若紫かいま見の場面)

げんじものがたり えまき  
源氏物語絵巻

わかむらさき すえつむはなのまき  
若紫・末摘花巻 (重要美術品)

縦 30 cm 横 901 cm

鎌倉時代末期写

今から約千年の昔、時の中宮に仕える一人の女性紫式部によって、才能にあふれ、光君と称されるほどに美しい皇子を主人公とする『源氏物語』が著された。この皇子は源氏姓を賜り、さまざま個性を持つ美しく高貴な女性たちと華やかな恋を繰り返していく。以後この小説は、物語文学の最高傑作として、音楽・絵画・工芸その他、様々な分野に多大な影響を与えていった。

中でも絵画においては、各時代を通じてかき継がれ、「源氏絵」という一つのジャンルを作り出した。



(若紫)

それらの作品群の中で、現存最古のものは平安末期作の国宝『源氏物語絵巻』、これに続く第二番目が、鎌倉末期作とされる本書である。本書は「若紫」巻前半と「末摘花」巻冒頭からなる。今は断簡だが、本来は全五十四帖揃いであつたらしく、他に「落標」巻（メトロポリタン美術館蔵）が伝

わっている。

こうした絵巻物は本文と絵とが交互に配置されて、巻物を開きながら順を追って物語を楽しみ、鑑賞できる形式となっている。

上段の図版は「若紫」巻の冒頭、北山に出かけた光源氏の一行が、出迎えの人々と管弦を楽しむ場面。小振りな十三絃の琴を膝に置くのが光源氏。下段は、光源氏が生涯にわたって最も愛した女性若紫（後の紫上）を初めてかきま見る場面。おおらかな構図に草木が明るい雅趣を添えている。

（天理図書館 岡嶋偉久子）

## 天理図書館開館のお知らせ

平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）  
ただし2月14～23日（蔵書点検）、28日は休み